

| | |
|------------------|---|
| Title | 稀少性原理と先験主義 |
| Sub Title | Scarcity definition and transcendentalism |
| Author | 富田, 重夫 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1951 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.8/9 (1951. 9) ,p.507(43)- 521(57) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19510901-0043 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510901-0043 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活の組合せが求められなければならない。それは依然として家族制的相互扶助に片足をふみつつ、その教育的序列は既に崩壊の過程にあるもの、いいかえれば前近代的な家族的生産に一部依存しながらも、これに吸収されず逆にこれを基礎として労働市場に長期滞留する生活不安にたえようとする一類型として裏附けられるのではないであろうか。

これはかつて潜在失業のプールとみなされていた農山村において、すでに歸農の經營的餘力のないまま失業者をかかえこみ、彼等は一應全世帯員の犠牲において徒食しながらなお労働市場にわずかの勤務を求めては身輕にとび出してゆこうとする傾向とも考え合せることができる。^(註1) また初期の産別系組合がその大勢順應的組織態度や經營内の性格にもかかわらず、かえつて經營の人的物的あるいは財産的背景を利用することによつてその未成熟をおぎない、活潑な闘争を展開しえた所以とも全然無關係ではないのかもしれない。^(註2) 勿論それが國民大衆の民主化、労働者階級の近代化として望ましい傾向であるか否か、またそもそも現實はかかるものとして確認されるか否か、すべては今後の問題としてとされるであろう。唯本編ではこれを彼等の飛躍的近代化とも舊態依然的停滞とも異なる第三の可能な動向として、考えられる少くとも二つのものであることを、指摘すれば足りるのである。

(註1) 籠山京氏「失業潜在化の過程」労働問題研究第四八號。殊にその芝富村アンケート(1)及び(3)参照。

(註2) 東京大學社會科學研究所編「戦後労働組合の實態」昭和二五年、一〇頁、一六一―一七頁。

稀少性原理と先驗主義

富田重夫

一 序 論

周知の如く經濟學方法論には二つの大きな流れがある。即ち英國流の方法論と獨逸流のそれである。而して前者は主として經濟理論(法則科學としての)そのものの自己反省と云ふ形に於いて、その問題が設定せられてゐる故に、その方法論はその經濟理論と表裏の關係に立つてゐると思はれる。これに對して後者は、一方には歴史學派の經濟史學方法論に、他方には純粹なる哲學としての認識論に、その起源と立脚點を有する故に、その方法論と現存せる經濟理論との具體的關聯は必ずしも明確とは思はれない。歴史學に於ける方法と理論に於ける方法とは各々その所を有しつゝ、相異なるものであり、他方形式の學としての認識論と内容の學としての科學とは、兩者がそれらに嚴密性を増せば増すほど相分たるべき性質のものである。認識論上の先驗主義、或は經驗主義は科學の内容そのものを規定するを得ない事は勿論、後者の發展過程との即應的關係を見出す事

稀少性原理と先驗主義

も困難である。それはニュートン物理學を絶対的眞理と前提して、その上にその認識の可能性を問ふ彼のカント哲學に對するヘーゲルの一つの批判點であつた。^(註1) 既成のものに牆を繞らすと云ふ事が多くの方法論者自らの主張する如く方法論乃至認識論の學としての性格であり、そこに斯學の意義と限界が存すると思はれる。

他方、科學の發展をその内容に即して、その用ふる概念の性格より之を考察するならば、その發展を劃する一つは所謂實體概念より關係概念への轉換にある如く思ふ。嘗て、W・ケラー^(註2) やK・レヴィン^(註3) が心理學に於いて、又E・カッシーラー^(註4) が數學に關聯して、關係概念への科學の發展を示したが、我が經濟理論の發展に於いても、茲に一顧を要する問題があると思ふ。前に私は經濟なる概念に就いてL・ロビンズの物質主義定義と稀少性定義の概念の性格に於ける相違を考察したが、此は正に實體概念としての經濟概念と、關係概念としてのそれであつた。私は科學の方法論的乃至認識論的考察が科學の理論内容に即する爲には、即ち兩者が密接に具體的に關聯して行く爲には、科學に於ける概念の性格を検討しなければならないと思ふのである。而して一定の概念が構成せられるには、何らかの認識の主觀客觀の關係が豫想せられてゐなければならぬ。斯くて概念の性格を検討する事は、更に根本的にかゝる概念が如何なる認識の主客の在り方から成立するかを明らかにしなければならぬ

いであらう。

以上の如く考へる故に、私は先づ一方にカントの認識論的立場を經濟學認識論に導入せる左右田喜一郎氏の經濟概念の先驗論的構成論を考察し、他方關係概念としての稀少性定義に於ける經濟概念を検討して、兩者の論理的關係を明らかにし、更に自然科學に對する文化科學の特性を考慮しつゝ、稀少性概念成立の基礎たる認識の構造を論じてみたいと思ふ。

(註1) ヘーゲル著、松村一人譯「小論理學」一八二頁

(註2) W・ケラー「ゲシュタルト心理學」及び「心理學に於ける力學說」

K・レヴィン「トポロギー心理學の原理」及び「Dynamic Theory of Personality」

(註3) E. Cassirer, "Substanzbegriff und Funktionsbegriff,"

(註4) 拙稿、三田學會雜誌、第四十三卷、第三號

二 先驗論的概念構成

左右田喜一郎氏に依つて主張せられた經濟概念の先驗論的構成とは如何なるものであつたか、氏は此をその所謂心理主義的實在論的概念構成の批判に即して展開する。近代の經濟學に於いても尙多く見られる所の此の心理主義的概念構成とは「經濟學の出發點を欲望に求め、之より其對象たる物一般を得、其の

内より經濟學上の財を導き之に關聯せしめて經濟行為の概念を定め進んで之より經濟の意義を決し、更に經濟組織の完成したるものとして國民經濟を拉し來りて吾が經濟學の對象を定め得べし」となすものであり、又物一般より經濟財を導出するに當つて例へば「物全般から先づ内界物を去り、之に對する外界物より權利物及び勞力物を含む無形物を去り、更に有形物中よりは自由物及び不自由物たる非經濟物を去りて後に殘留する財のみを經濟物と云ふ」が如きものである。こゝに問題となるのはこの概念構成が欲望から出發すると云ふ點にあるのではなくして、一般に單なる存在系列の分類の結果として經濟學の對象を決定せんとする點にある。換言すればもの存在を前提してそれより或る種のものを経済的として任意に抽出する點にあるのである。此は正にL・ロビンズの物質主義定義に於ける經濟概念の classificatory なる構成と同一のものである。さて、左右田氏はかゝる概念構成に對して次の如く批判する。即ち、右の經濟財なる概念の決定に就いて検討する時「或る種のを排し、他の種のを採り來りて、之が經濟學上の正當なる概念なりと云ふ決定を與へ得る所以の標準は何處にあるか」と。即ち何故に一方を採り、他方を排するか、それが如何にして可能なりやが何ら明示されてゐないのである。従つてこの立場からすれば單に斯くある故に斯くの如しと云ふに止まり、斯くて此は經驗科學の領域に於いて "quaestio juris" に觸れる事な

く "quaestio facti" に終始せるものと云はざるを得ず、かゝる概念、更にそれに基づく理論の論理的妥當性は之を證すべくもない。カントと共に、かく存在したと云ふ事は出來ても、何故それ以外のものであつてはならぬかを證すべき根據を缺いてゐると云はざるを得ない。更にかくして構成せられたる概念は「此の場合に經濟物とは必ず欲望充足の對象の或る一種のものとしてしまつて經濟物と云ふ概念を吾人の認識對象の『實在』に結び付けるに至るから、經濟物と非經濟物とが概念上流通を許さぬ確固不動の區分となつてしまひ、所謂經濟物は始めから終りまで欲望充足對象中の或る一定の範疇を形成するが如く説かるのである」(註4)。その結果「或る一定の欲望物、行為、組織の一定の範疇は少くとも或る期間、状態、關係に於ては常に而して必ず經濟的なるべし」と云ふ事になる。換言すれば存在に纏り附く概念の固定性を脱し得ないのである。

さて以上の心理主義的概念構成の缺陷を正すものは、唯かゝる概念構成に當つて何らかの先天的要素を認める事である。即ち種々様々なる欲望行為等の存在系列に對して論理上先なるものを認める事に依つて、その概念は必然性と客觀性を有し得るのである。經驗科學としての經濟學に於いても又かゝる先天的要素がなければならぬ。斯學に於けるかゝる先天的要素とは窮極的には「經濟的文化價值」と稱し得べきものであり、之を「認識目的」として、之に照應せしめて存在が把握せられる所

稀少性原理と先驗主義

に一切の經濟學上の概念は構成せられ得るのである。併し茲に經濟的文化價值とは斯學の認識目的として窮極的 Sollen なる故に、それ自體は對象的認識を許さざるものであり、従つて經驗的文化科學としての經濟學に於いては更に先天的にして且つ歴史的なる概念、價值と存在を媒介すべき概念(「嚮導概念」貨幣概念)なるものが要請せられねばならない。かくて經濟的文化價值をその認識目的とし、嚮導概念としての貨幣概念を持ち來たす事に依つて經濟學の概念構成は可能となるのである。前述の心理主義的概念構成も實はかゝる先天的要素に導かれて始めて可能となるのである。存在系列の諸々の分類の結果として得られるとする經濟概念も何ら論理の必然を以て得られざる結果ではなくして、無意識的にも何らかの先天的要素に依つて導出せられるべき結果でなければならぬ。かくの如くして構成せられたる概念は論理的に必然的たるべく、又、前述の心理主義的構成に基づく概念の如く或る種ものは常に必ず經濟的にして、他は又常に必ず然らずと云ふ如き不合理を免れて「同じ人も、行為も欲望も、同じ物も、組織も、夫々の認識目的に係りて同時に而して同じ状態に於て諸學の對象となつて、夫々の異なる概念が形成せられうる」事となるのである。或る事物はそれ自體に於いて經濟的であるのではない。それはその事物を或る觀點から即ち經濟的文化價值なる認識目的に照應して把える所に經濟的となるのである。

以上は左右田氏の先驗主義的概念構成論の概略であるが、リッケルト、ウェーバー等に於ける所謂「價值關係的」に構成せられたる概念の論理的特性は右の如きものである。之を要するに先驗主義的概念構成論の窮的意義は一に認識論的に認識の主客の關係に於いて、その認識主觀の形式としての諸文化價值に依つて諸學の概念が構成せられるとなす事、斯くて存在に纏り附く概念の固定性を克服した點にあると考へられるのである。茲に於いて先驗主義に就いての検討を後に譲り稀少性定義に於ける經濟概念を考察したい。

(註1) 左右田喜一郎著「經濟哲學の諸問題」 五七頁

(註2) 左右田喜一郎著、前掲書 五八頁

(註3) L. Robbins, Nature and Significance of Economic Science, P. 16,

尙左右田氏はロビンズの classifactory なる概念のみならず稀少性定義に於ける經濟概念をも又その所謂心理主義と斷じてゐる。此の點は後に一批列點として論ずる。

(註4) 左右田喜一郎著、前掲書 六八頁

(註5) 左右田喜一郎著、前掲書 六九頁

(註6) 左右田喜一郎著、前掲書 七〇頁

三 稀少性定義

經濟學の對象決定の問題に就いてL・ロビンズは物質主義定

A.C.ピグーが「何らかの嚴密な方法で經濟的厚生を他の厚生部分から分離する事は實際出来ない事柄である」と云ふのは貨幣尺度と關聯する事の出来る部分はこの出来る、と云ふ事が「容易に出来る」と云ふ事か、或は「かなり無理をして出来る」と云ふ事か、或は又「非常な無理をして出来る」と云ふ事かそのいづれを意味するかに依つて異なつて来るからである。従つて我々の領域(經濟的)は必然的に漠然としてゐる。」と云ふのも此の事を裏書きするものであらう。對象的存在の一部として經濟的なるものを求めんとする故に、vague line に撞着するのである。併し經濟性は或る種のものに固有な屬性ではない。更にこの種概念には何故にそれが經濟的でなければならぬかの論理的根拠が明らかではない。A.L.マクヒューもその所謂記述的定義 descriptive definition(=物質主義定義)に對して分析的定義 analytical definition(=稀少性定義)を説くに當り、前者に就いて「それは、何故に或るものはそのことにあり他のものは然らざるかの論理的理由を與へない。この機能は記述的定義に對する分析的定義の特質と考へられる」と云つてゐる。^(註4)以上を對して稀少性定義に於ける經濟概念は之を E=M に對して示せば、E=(P,G) (P=person, G=goods) を以て示し得るであらう。人間は何らかの欲望を有する。併し茲にPとは如何なる種類の欲望を有するものであらうと、それは問ふ所ではない。又ものは種々なる屬性を有する。併し茲にGとは如何

稀少性原理と先驗主義

義と稀少性定義を區別した。^(註1)而して前者は之を E=M, non-E = non-M, (E=economic, M=material) を以て示し得べきものである。茲にMとはその内容的側面より見れば、常識的に通常物質的の欲望と云ふが如き物質的なるものを指示し得るし、或は價格に關係する現象とか貨幣なる測定尺度を以て測定し得る厚生部分と考へられるが、之をその形式的側面よりすればMとは對象的存在の或る屬性(主觀の表象内容)を記述せるものである。従つて茲にEとは、物とその屬性に基礎を置く所謂實體概念としての經濟概念と考へられるものである。それはE・カッシーの次の言葉に依つて端的に示されるものである、即ち「實際、茲に前提せられてゐるものは、唯、測り難い程多數なものの定在と、多くの個々の個別的な存在からそれらの多くに屬してゐる同一の要素を抽出する精神能力とだけである。我々はかくの如くして、同一の屬性を共通に有してゐる事に依つて特徴附けられる對象を一つの類に結合し、この方法を繰り返してより高度の段階へと押し進める事に依つて漸次、個々の事物から引出される事物的類似性の諸段階に應じて、益々より確實な存在の秩序と分類に達するのである、……かくて生ずる概念は感覺的現實に無關係なものとして、之に對立するものではなくして、この現實そのものの一部分を構成するのである。即ち現實に直接に包含せられてゐるものの抽出物なのである」^(註2)従つてかゝる經濟概念は前述せる如き存在の制約を免れ得ない。

なる屬性を有するものであらうと問題ではない。問題はPの欲望及びGの屬性の種類に在るのでなくして、兩者の關係そのもの、或は兩者の相合して醸し出す状態そのものにある。Eなる經濟概念は正にかゝる關係或は状態そのものである。C・メンガーを始め、L・ミーゼス、L・ロビンズ等に於いてこの關係はPVG(Pは需要量、Gは供給量)であつた。而してこの關係或は状態なるものは常に固定的に存在するものではなく、その時、その場所において成立するものである。常に必ず存在するとは却つて如何なる時間、空間をも超越する故に、現存せざるものである。これに對して茲に關係とは何らかの具體的時間・空間に於いて成立する。具體的時間・空間とは個別的な時・空である。具體的なるものは、かゝる個別的な時・空に於いて現存する。他方前述する如く、こゝに於いてはすべての欲望的人間とすべてのものがその中に含まれてゐる。勿論それは可能性として包含せられてゐるのである、即ち經濟的たりうる可能性を有するものとしてである。一面何處までも個的に成立し乍ら、他面すべてのものをその可能性に於いて包含すると云ふ事が茲に示されるEの論理的性格である。斯くてかゝる關係或は状態そのものである經濟概念は所謂關係概念として、彼の實體概念としてのその如く個別的なものに於いて考へられる。表象の普遍的内容ではなくして、個別的なものに於いて「一般的妥當性を要求するもの、換言すればすべての個別的なものがそれより導出せらるべき一般

的形式と考へられるのである。E・カッシーラーは數學の一般概念に就いてのランベルトの所説を引用して曰く「數學の一般概念に於いては、それが適應せらるべき特殊の場合の規定性は放棄せられてゐるのではなくして、嚴密に保持されてゐる。數學者がその諸形式を一般的に構成する時、これは單に特殊な場合を悉く持つてゐるのではなくて、一般的形式からこれらを導出し得ると云ふ意味と傾向を持つてゐるのである。」^(註5)又曰く、「個々の場合は考察外におかれてゐるのではなく、それは變化の一般的過程の一定の段階として確定され、確保されてゐるのである。更に新たに茲に示されてゐる事は、表象の一般性ではなくして、系列原理の一般的妥當性が概念の特質をなしてゐると云ふ事である。我々は眼前に存する多様性から何らかの抽象的部分を抽出するのではなくして、この多様の系列の爲に一義的な關係を、その關係を一つの明確な法則に結び付けて考へる事に依つて、創り出すのである」^(註6)。これは正に稀少性定義に於ける經濟概念に妥當する事柄であると思ふ。而して以上に論述せる二つの概念の論理的性格の差異を把握する事は經濟理論の發展に於いて極めて重要な意義を有するものと考へる。彼の Marginal Revolution の論理的意義は茲に求められなければならぬと思ふのである。

(註1) L. Robbins, op. cit., chapter 1.

(註2) E. Cassirer, Substanzbegriff und Funktions-

begriff, P. 5-6.

(註3) A. C. Pigou, Economics of Welfare, P. 11.

(註4) A. L. Maché, Economy and Value, P. 2.

(註5) E. Cassirer, op. cit., P. 24.

(註6) E. Cassirer, op. cit., P. 25-26.

四 兩者の論理的關係

以上に於いて私は左右田氏の先驗論的構成に依る經濟概念と稀少性定義に於けるそれを個別的に考察したのであるが、然らば兩者の論理的關係は如何なるものであらうか。既に前述する所から明らかなる事は、前者の所謂心理主義的概念構成に於ける經濟概念と、後者の所謂物質主義定義に於けるそれとは同一の論理的性質を有するものであり、而も兩者のそれとに對する批判に於いて、その所説を共にしてゐるのである。即ち、第一にそれらの概念にはその論理的必然性が缺けてゐる事、第二に、それらが共に存在の普遍的表象内容なる故に、それらは存在に制約せられ、固定的なる事これである。斯くて兩者がそれ等を克服せんとする意圖に於いて同一であつたのである。詳言すれば前者、先驗論的概念構成は認識主觀の形式としての價值への照應に依り、他方後者、稀少性定義は關係概念としての經濟概念を説く事に依つてそれとに經濟概念の論理的必然性の缺除と存在の制約を克服せんとしたのである。然らば兩者の

根本的な相違は何處にあるか、又左右田氏が稀少性定義をも、その所謂心理主義と云ふは何故であらうか。抑と所謂先驗主義とは所謂認識論上の一つの立場を示すものである。従つて茲に於いては認識の主觀と客觀及びその關係が問題である。それ故ものと人間の意識との關係は、かゝる認識の主客の關係なる形に於いて把えられてゐるのである。而して先驗論的概念構成は、この關係に於いて、概念構成の根底を認識の客觀ならぬ認識の主觀の觀點に求めたものである。これに對して稀少性定義に於いては、ものと欲求の人間の關係が問題であり、ものと人間の意識の關係は、かゝる形に於いて把えられ、この關係を示す事自體が直ちに前述の克服をなす所以であつたのである。茲では認識の主觀としての「人間」ではなくして、欲求する主體として現實界に於いて經濟的活動を營む「人間」が問題なのである。即ちかゝる欲求の人間の意識との關係に於いてものが相對化せられてゐるのである。兩者の間には經濟學者に問題があるのか、經濟人に問題があるかの相違がある。茲に於いてそれは認識論と經驗科學としての經濟學の相違と云へばそれ迄の如くであり、又兩者の相違は混同されてはならない事は勿論である。併し先驗主義が單に *Sollen* としてそれ自體對象認識の不可能なる經濟的文化價值を要請するに止まるならば、經驗科學の發展に如何なる貢獻をなし、又如何にして之に即し得るであらうか。又かゝる *Sollen* と經驗的 *Sein* とを架

稀少性原理と先驗主義

橋する嚮導概念として貨幣概念を持ち來すとしても、その先天的且つ歴史的なる論理的性質は單に貨幣概念に附與されてゐるに止まり、内容的且つその定式化に於て例へば A・C・ピグーの *measuring-rod of money* への關係に於いて經濟的厚生を考へるのと何處が異なるであらうか。況んや稀少性原理をも單に心理主義と考へるのは、關係概念の有する論理的性質を理解せざるものではないからうか。^(註7)リッケルト等もその方法的論議に於いて關係概念の論理的性質を問題としてゐない。例へば曰く「我々はこの又はあの特定の一回的現實の特殊性や個性が全く含まれてゐない概念を悉く普遍的と呼ぶが、その際普遍的諸概念の依つて成立する諸過程に於ける差別は顧慮しない。同様に我々はそれが關係の概念であるか、事物の概念であるかも之を問はない」^(註8)云々と、併し私はこれらの概念の論理的性質を検討する事の中にこそ、方法的乃至認識論的論議をして科學内容に即せしめ得る可能性を見出し得ると考へるのである。而も前述する所からして、先驗主義の有する論理的觀點は關係概念の論理的性質に相應すべく、斯くてかゝる概念に依つて、經驗科學が構成せられる所に先驗主義は經驗科學の中に自らの具體的適應を見出し得ると思ふのである。E・カッシーラーは「アインシュタインが、相對性理論に於いては、時間・空間から「物理的對象性の最後の殘滓物」まで取り除かれてゐると云ふ事をこの理論の特質として示してゐるとすれば、批判的觀念論の立

場は、この理論に依つて、經驗科學そのものの内部に於けるその最も嚴密な適應と完成を創り出されてゐると云ふ事が茲に示されてゐる」と云ひ、先驗主義と物理學上の相對性理論の具體的交渉を明らかにし、認識論と經驗科學の關係に重要な一つの歸結を與へたのであるが、我が經濟學に於いては、先驗主義は稀少性原理の中にその適應を見出し得ると考へるのである。

茲で更に根本的に以上の如き二つの克服の方向の生ずる根元を考へてみたい。これには所謂文化科學（或は精神科學、社會科學）の特性を考へてみる必要があると思ふ。従來自然科學と文化科學とは諸々の觀點から區別されて來た。その對象の側面からは、或は物的存在と心的存在の區別に或は又存在（物的及び心的）と價値の差異に、又作用の側面からは普遍化的及び個別化的概念構成と云ふが如きである。今茲にこれらに就いて論ずる事は出来ないが、先づ文化科學と云ふものが、何らかの意味で人間的なるものに關係してゐる事は事實である。物理學に於ける所謂ニュートン物理學―相對性理論―量子力學への發展は之を認識の主觀に就いて見れば意識一般としての主觀―觀測者としての主觀―操作的な主觀への發展であり、之を客觀に就いて見れば、主觀に對する客觀から、主客の不可分離の認識を通じて所謂主觀客觀を包む高次の客觀への發展と考へられる。斯くて物理學の對象と雖も所謂意識一般に對する客觀ではなくして、

我々の實驗的操作を媒介してゐる所の客觀と考へられなければならぬ。然し物理學に於いては、ものと人間の關係は何處まで行つても認識の主客の關係の外に出るものではない。これに對して文化科學に於いては人間ともの關係は二重的である。

我々は一方科學者としては認識の主觀として認識の客觀に對し、他方自らこの客觀に於いても働かせる主體である。我々は經濟學者たると共に經濟人である。それ故我々は文化科學に於いては、自己が自己を認識しなければならぬと云ふ事態に置かれてゐるのである。リッケルトは、現實は異質的にして且つ連續的であり、これは不合理なるが故に、現實そのまゝを直ちに合理的に認識する事は出来ない。而して現實の合理的認識の可能なる道は、この現實を同質的連續へか異質的非連續へかのいづれかへ環元する以外には存しないと考へ、茲に現實そのものの構造から二つの科學の成立の根據を示した。彼の爾餘の論議の根底はこの考への中に存すると思はれるのであるが、これに對して私は文化科學の認識構造の特質は前述の人間存在の二重的性格の中に求め得べきものと思ふのである。W・ディルタイは「人間を對象とする諸科學が人間の自己自身に對する省察といふこの遙かな目標を目指して絶えず進んでゐるといふことは歴史が明らかに示してゐる」と云つてゐる。文化科學方法論上の種々なる問題、例へば「理論的價値關係」と「實踐的價値判斷」の區別の如きが生ずるのも正に右の文化科學の特

性に基づくと考へられるのであるが、前述せる先驗論的概念構成論と稀少性定義の兩者に依る存在の相對化―即ち經濟學的認識主觀の意識に於けると、欲求的經濟主體の意識に於ける―は右の文化科學の特質に、その相分たるべき論理的根據を有するものと思ふのである。

左右田氏の經濟的文化價値の論議は杉村廣藏氏に依り所謂經濟性の原理として具體化せられた。茲にその事實的過程は如何にあらうと、その論理的意味に於いては、認識論上の前者の論理的觀點は後者に於いて經驗科學への適應を見出すものと考へられると共に、文化科學の本質的構造より來る二つの方向であつたと思ふのである。

- (註1) A. C. Pigou, op. cit., P. 11.
- (註2) 所謂稀少性原理が心理主義的或は心理學的なものに非ざる所以は例えばL・ミーゼス等に於いて人間行動の意味の把握と云ふ點から説かれしである。(L. Mises, Grundprobleme des Nationalökonomie, P. 143-145.)
- (註3) リッケルト著、佐竹・豊川共譯「文化科學と自然科學」八二頁
- (註4) E. Cassirer, Zur Einsteinschen Relativitätstheorie, P. 79.
- (註5) 下村寅太郎著「自然哲學」九三一―一三七頁
- (註6) リッケルト著、前掲書 六八一―七一頁

稀少性原理と先驗主義

- (註7) デイルタイ著、水野・細谷・坂本共譯「歴史的理性批判」デイルタイ全集第四卷、創元社刊 一〇頁

五 稀少性原理と了解

リッケルト、デイルタイ、ウェーバー等に於ける文化科學的認識は了解的と云はれる。私は右に論じて來た稀少性定義に於ける認識とこの了解的認識を對比して考察してみよう。これを考察せんとする所以は次の如くである。即ち前述の如く稀少性原理は $B \parallel E, P, G$ として定式化せらるべき關係概念であつた。併し關係概念と云ふものは自然科學的(物理學的、心理學的等)現象に於いても成立する事は云ふまでもない。それ故 $B \parallel G, P, G$ が自然科學的現象の關係概念的定式化と異なる所以を考へてみなければならぬ。又關係概念に於いては、すべての事物が個的時間・空間に於いて現存するものとして把握せられるとしても、リッケルトが云ふ如く歴史的(價值的)個性と單なる量的個性とは區別せられなければならないであらう。この爲に私は $B \parallel P, G$ そのものを成立せしめる認識が如何なるものかを明らかにする必要があると思ふのである(特に了解的認識に對比せしめて)。

J・S・ミルに始まり、J・E・ケアンズを通じてJ・N・ケインズに至る經濟學方法論上の基本的な考へ方の一つは、經濟現象とは心的及び物的現象の混合形態であり、従つて經濟的認

識は、心的及び物的現象に就いての諸法則をプレミスとする演繹的認識であると考へる點にある。^(註3)而して茲に於いては、心的なるものも物的なるものも共に存在^(註4)として把握せられ、所謂外からの觀察或は説明がその認識の特質をなしてゐる。これに對して、リッケルト、ディルタイ、ウェーバー等に於いては周知の如く精神科學或は文化科學の對象は、存在に對する價值或は意味そのもの、或はかゝる價值、意味がその中に實現せられ體現せられてゐるもの、即ち價值、意味を荷ふものであつた。勿論價值を荷ふとは我々の主觀が附與する事である。

而して斯く考へられた所以は、人間の行爲の自然の運行と區別せられる所以のものは、前者が何等かの動機を通じて何らかの主觀的意味、「行爲者の主觀的に思念した意味」^(註4)、*der subjektiv gemeinten Sinn des Handelnden*、を有する意識的行動である、一少くともそれが行爲の原型である、一と云ふ點に存すると考へられたからである。自然現象に於いては過去が現在を、そして未來を規定する、所謂因果的である。人間の行爲に於いては逆に未來が現在を、そして過去をも規定すると云ふ意味がなければならぬ。「目的合理的」*zweckrational*「價值合理的」*wertrational*でなければならぬ。従つて斯かる人間の行爲を認識の對象として、之を認識するには、單に外からの觀察に依る事は出來ず、内からの理解、即ち價值或は意味の了解、或は追體驗がその根柢とならなければならぬと考へられ

て來るのである。

これに就いて茲には唯次の點を問題とする。即ちこの立場に於いてはその自然科學に對する文化科學の特質が認識の面から主知主義的に考へられてゐると云ふ事である。その存在と價值の對立は認識の對象のそれであり、又普遍的と個別化的概念構成の對立は認識の作用のそれであり、更に又了解、理解とは認識そのもの特質である。それは何處までも、ものに對する解釋の立場から考へられた區別であり特質であると思ふ。人間の行爲は何らかの意味を荷つてゐる。併し意味を荷ふには荷ふものがなければならず、更に荷ふと云ふこと、事實がなければならぬ。或は意味を、價值を考へると云ふなら考へるもの、考へること、考へると云ふ事實がなければならぬ。問題は存在に對する價值、意味そのものにあるのでなくして、價值を荷ふもの、荷ふと云ふこと、荷ふと云ふ事實そのものにあるのである。例へばそれは價值の主觀的なるか客觀的なるかに問題があるのではなくして、たとへ主觀的な價值を荷ふものであらうとかく荷ふもの、かく荷ふと云ふ事自體は疑い得ない嚴然たる客觀的事實でなければならぬと云ふが如くである。認識と云ふものも單なる作用ではなくして、そこには認識すると云ふ事實がなければならぬ。又ものは單に認識の爲に存在するものでなくして元來人間に對する行爲的抵抗としてあるのである。認識する事も實踐でなければならぬ。價值を荷ふと云ふこ

と、考へると云ふこと、かかる行爲的事實性を現實でなければならぬ。

斯く考へ得るならば我々が文化科學の特質、更に經濟概念を求める根本的立場は所謂觀察の對象としての存在^(註4)の區別より求むべからざるは勿論、又單に認識の面より所謂認識論的にその對象及び作用から區別し之を求めるに止まるを得ない。我々の根本的立場は經濟財とは之を人間に對するものの一種の行爲的抵抗状態^(註5)一種とは勿論もの特殊性ではなくして、すべてのものをその可能性に於いて含む状態そのもの特殊性に於いて把える事である。而も把えるとは觀察的に把える事ではなく又かかる状態に對する解釋の立場から理解する事でもない。それは經濟人自身の自覺である。經濟人とは經濟的抵抗状態の構成要素であり、かかる状態そのものに於いてあるものであると共に、かかる状態そのもの自己限定として自ら自覺し、斯くて状態そのものを把える辯證法的自覺的主體と考へられるものでなければならぬ。經濟人の自覺は即ちこの經濟的狀態(世界)の自覺であり、逆に後者は前者を通じて自らを明らかにする如きものでなければならぬ。謂はば、世界内存在の世界内超越としての自覺こそ經濟人の在り方であると共に、それが經濟的認識の根本原理となるものでなければならぬと思ふのである。

譯つて $E=H(P, G)$ に於ける經濟性を考へるならば、茲に P

稀少性原理と先驗主義

は單に欲求的自己として目的合理的に行爲し $H(V, G)$ の關係に立つのみではなくして、その自覺として $E=H(P, G)$ そのものを成立せしめるものでなければならぬ。従つて $E=H(P, G)$ は自然現象の關係概念的定式化に於ける如く、單に對象的事象の相關性を定式化したものではなく、又茲に E とは、この關係自體に於いて存する主體の自覺内容であり、又 $H=H(P, G)$ とはかかる主體の於いてある關係状態(世界)自體の自己表現の形式と考へられるものである。それは經濟事象の存在構造の表現形式であり、而してその表現は經濟事象内存在の自覺、所謂内省 *Introspection* を通じてなされるのである。了解的認識の立場からすれば、その了解的主觀は何處までも了解の對象に對する解釋的主觀に止まるであらう。これに對して内省、自覺とは事象内存在の、事象そのものの、底からの反映である。若し内省を主觀的と云ふならば、その主觀的とは何を意味するか、又如何なる立場からかく云ふかを自問すべきである。

私は前に先驗論的概念構成の原理は關係概念としての稀少性定義の經濟概念に於いて自らの具體的適應を見出し得ると論じた。併し今や稀少性原理に於ける認識、即ち内省(自覺)の分析を通じて得られる結論は、稀少性定義の經濟概念の論理的意義は方法論乃至認識論上の先驗主義の經驗科學としての經濟學への具體化と云ふに止まらず、後者の觀點を存在論的に越え行くものであると云ふ事である。尤も稀少性原理に於ける内省の

原理は尙自己が自己を見ると云ふに止まり、それが眞に世界の
自覺と云ふ意味を有するとは考へられない點に於いて、又その
世界そのものが抽象的であると考へられる點に於いて尙主觀的
と考へられるが、少くともその方向に於いて右の如く考へ得る
と思ふのである。

(註1) リッケルト著、前掲書 一九五頁

(註2) この事は、同じく限界概念に依る分析をなすウィー
ン學派とローランヌ學派の思考様式の相違を見るに重要
な點であると思ふ。

(註3) 例へばケアンズは次の如く云ひつゝ云ふ。"The subje-
ct matter of Political Economy is thus neither
purely Physical nor purely mental, but possesses
a complex character, equally derived from both
departments of nature, and the laws of which are
neither mental nor physical laws, though they
are dependent, and as I maintain, dependent
equally on the laws of matter and on those of
mind." (J. E. Cairnes, The Character and logical
method of Political Economy, P. 48)。
(註4) "It may be well... to consider the position
occupied by economic speculation in relation to
the two great departments of existence—matter

併しウェーバーの理想型の論議に依つて法則科學としての文
化科學の可能性が示されたであらうか、彼の了解の方法は法則
的普遍性を獲得し得る如きものであつたであらうか。否、彼が
本來求めてゐるものは法則的普遍的なものではなくして、逆に
かかる法則から演繹し得ない個性的現實の認識であつた。^(註2)理想
型も法則もその手段に過ぎない。更に彼の考へる法則 Gesetz
とは個性的なものと兩立し得ないものである。彼は云ふ「精密
自然科學にとつては『法則』は、それが普通妥當的であればあ
る程、益々重要であり、價值があるものであるが、その具體的
前提に於ける歴史的事象の認識にとつては、最も普遍的な法則
はその内容が最も空虚なものであるから、通常又最も價值に乏
しい。と云ふのは、類概念の妥當性、その範圍が包括的であれ
ばある程、それは豊かな現實から我々を遠ざけるからである。
實際類概念が出来るだけ多くの現象に共通なものを含む爲には
出来るだけ抽象的な、従つて内容に乏しいものでなければなら
ない。文化科學にとつては、普遍的なもの^(註3)の認識は、それ自身
として決して、我々に價值あるものではない」と。L・ミーゼ
スは云ふ、「ヴァインデルバント、リッケルト、M・ウェーバー
は自然科學と歴史とを識別したが、法則科學としての社會學が
あると云ふ事は依然として彼等に縁遠い事柄である」と。^(註4)M・
ウェーバーは國民經濟理論の學問體系を認めなかつた。國民經
濟學と社會學は彼の眼には歴史科學であつた。社會學は、彼に

稀少性原理と先驗主義

五五 (五一九)

and mind." (J. E. Cairnes, op. cit., P. 48)
(註5) M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissens-
chaftslehre, P. 405.
(註6) かかる事實の考へは西川幾太郎氏の所謂 Tat-Sache
の考へに據つてゐる。

六 法則的普遍性

リッケルトの云ふ如く現實の合理的認識の可能なる道は、現
實を同質的連續へか、異質的非連續へかのいずれかへ還元する
唯一の道じかないとすれば、更にこの兩者が論理的には絶對
に相容れない兩端であるとすれば、法則的普遍性は自然科學に
のみ認められ、價值的個性的なものと法則的なものは何處ま
でも相對立し、價值的なるものに就いての法則性と云ふが如き
事は所詮論理の矛盾でしかないであらう。そして價值的個性的
なものに關する文化科學の客觀性は、その價值的普遍性、客觀
性に、而も文化科學の領域に於いては「事實上一般に(換言す
れば萬人によつて)價值ありと認められる」^(註1)如き意味の價値の
經驗的普遍性に求めるの外はない。そして諸々の社會的文化科
學の事實に當面して曖昧なる「中間領域」の論議を以て答へる
外はなかつたと思はれる。この點はM・ウェーバーの所謂「理
想型」の論議に依つて社會科學の獨立性の確證と共に克服せら
れた事は周知の事柄である。

とつては、より強度の普遍化的な總括的な歴史の如きものであ
る^(註5)。又云ふ「彼は社會學として、人間行動についての法則
科學とは全く別な或るものを理解してゐた」と。^(註6)個性的なもの
と法則的なものとは所詮兩立し得ないものであらうか。この爲
には先ず『法則』として何を理解するかを考へる必要がある。
法則として第一に考へられるものは tendency としてのそれだ
である。例えばJ・E・ケアンズは「經濟法則は現象が起る秩序
を示すのではなく、現象がそれに従う所の傾向を示す。それ故
法則はそれが外的事件に適用される時は、攪亂の原因の存しな
い限り^(註7)に於てのみ眞理である」と云つてゐる如きである。茲に
tendency とは云ふまでもなく事實そのものとは異なる。"the
doctrine expresses not a matter of fact, but a tendency."
と云はれる如く。併しそれは a matter of fact ではないが
tendency as fact と考へられるものと思ふ。所謂 ceteris
paribus とは事實からの、而して事實に於ける抽象を示すもの
と考へる。かかる法則的實質的な普遍性は所謂事實界に於いて
繰り返えし經驗しうる事、即ち大量的觀察に基づく普遍的傾向
性を示すものである。従つてそれは前述の類概念の構成に於け
る如く、現實に於ける個別的現象の中に見られる或る普遍的な
る關聯個別性の抽象に於ける普遍的關聯と考へられるものであ
る。^(註9)類概念的(法則性)我々はかかる法則性を考へる限り個別的
なものと法則的なものとは形式論理の内包と外延の如く相容れ

ざるもの、逆比例的關係に立つものと考へる外はない。M・ウ
 エーバーの問題はかかる抽象的法則の中に入り來たらざる個性
 的なものの認識にあつた。彼の理想型は勿論、彼自ら云ふ如く
 類概念的なものではない。併し彼が法則として考へる所は(そ
 の肯定、否定、及びそれが認識の目的たるか手段たるかに拘ら
 ず)右の如くであつたと思ふ。それ故、所謂了解も個性的なも
 のの認識である。L・ミーゼスが意味の把握 (Erfassung des
 Sines) を更に所謂 "Verstehen", "Begriffen", に區別
 し、次の如く云ふ所以である「我々は人間の舉動についての科
 學に用ふる所の、意味の把握に注意を向ける方法の中に於いて
 把握 Begreifen と了解 Verstehen とを區別せんと思ふ。把
 握は推理的思惟に依つて意味を把握せんとし、了解は感情移入
 的精通に於いて一つの全體として意味を求めると」(註10)

E・カントは「繼起する現象の客觀的關係は、單なる知覺に
 依つては定まらない。それで此の關係が決定せられたものとし
 て認識されるためには、兩狀態の何れかが前に、何れかが後に
 定立され、それと反對に定立されることはできぬといふことが
 それに依つて必然的に決定せられるやうに兩狀態の關係が思惟
 せられなければならない。然し綜合的統一の必然性を伴う概念
 たりうるものはただ純粹悟性概念あるのみで、且つ概念は知覺
 中に存するものではない」と云ふ。因果法則の必然性は單なる
 知覺表象の普遍性に依るものではなくして、因果律なる範疇の

先天的必然性でなければならぬ。

又、L・ミーゼスは「社會學的因果命題は、概して生じがち
 であるが、必ずしも常に生じなければならぬ事はない所のもの
 の言表ではなくて、その前提諸條件が與へらるる限り、必然的に
 常に生じなければならぬ所のもの言表である」と云ふ。

かかる論理的要求を實質的に満たしうる如き法則とは如何な
 るものであるか、此を私は前述の E・F・C・G の形式に於いて
 見出しうると思ふのである。何となればこれはすべての個別
 的時間、空間に於いてその一般的妥當性を有するものなる故で
 ある。而もかかる謂はば關係概念的法則に於いては決して個別
 的なものは捨象されてゐない。又勿論それはウーバー等に於
 ける個性的なものそのものではない(それは歴史學の問題であ
 る)。唯個別的なもの捨象から得られるのではなくして、個別
 的なものに於いて、個別的なものを保有する一般的妥當性を有
 するものである。K・レヴィンはトポロギー心理學的法則的確
 立に當つて次の如く云つてゐる「過程の力學説は、常に具體的
 個人と具體的狀態との關係から、そして内部的諸力に關する限
 りは、個人を作りあげる種々なる機能的諸組織の相互關係から
 推論せらるべきものである」と。又「歴史的過程の偶然は、状態
 の變化を體系的考察から除外する事に依つて克服されるのでは
 なくて、具體的な場合の個人の性質を最も完全に考慮する事に
 依つてのみ克服される。それは法則の一般的妥當性と個々の場

合の具體性とは對立するものではないと云ふ事、又、具體的狀
 態の全體性への考慮が、屢々反復されるもの出來る限り多く
 の歴史的蒐集への考慮にとつて代らなければならないと云ふ事
 を留意する事に依存してゐる。この事は方法論的には一つの場
 合の重要性は、そしてその證明としての妥當性はその出現が屢
 々なるか否かに依つて評價され得ない事を意味してゐる」と。
 E・F・C・G はこの要求を満たし得るものである。而もそれ
 が單に心理學的法則的定式に盡きざる所以を、私は前述の如き
 P の内省、自覺の原理の中に求め得ると考へるのである。

- (註1) リッケルト著、前掲書 一六三頁
- (註2) M. Weber, op. cit., P. 172.
- (註3) M. Weber, op. cit., P. 179-180.
- (註4) L. Mises, Grundprobleme der Nationalökono-
 mic, P. 70.
- (註5) L. Mises, op. cit., P. 71.
- (註6) L. Mises, op. cit., P. 74.
- (註7) J. E. Cairnes, op. cit., P. 118.
- (註8) J. E. Cairnes, op. cit., P. 105.
- (註9) かかる法則に就いては G・シュモラー著、戸川武
 雄譯「國民經濟、國民經濟學及び方法」の一四四—一六
 五頁参照
- (註10) L. Mises, op. cit., P. 125.

稀少性原理と先驗主義

- (註11) E・カント著、天野貞祐譯「純粹理性批判」(上卷)
 岩波文庫二五五—二五六頁
- (註12) L. Mises, op. cit., P. 88.
- (註13) K. Lewin, Dynamic Theory of Personality,
 P. 41.
- (註14) K. Lewin, op. cit., P. 41-42.

七 結 論

以上に於いて私が明らかにせんとした事は、第一に方法論乃
 至認識論上の先驗論的概念構成の論理的意義は關係概念的論理
 的性格に相應すべく、斯くて關係概念を媒介として、先驗主義
 と關係概念による經濟理論との論理的結合の可能を示さんとし
 稀少性原理の中に具體的に此を示し得ると考へた事である。次
 に文化現象としての經濟現象に於いては、その關係概念は世界
 的内存在の世界内超越としての自覺(内省)に依つて成立する
 ものである事、かくて成立する理論に於いてはその客觀性、そ
 の法則の普遍性(必然性)と云ふものが根本的に異なつたもの
 となつて來る事を明らかにせんとしたのである。

(本研究は本學學事振興資金
 補助金に據るものである。)